

# 日本密教における『瑜祇経』所説の尊格理解

鍵 和 田 聖 子

## はじめに

密教においては、それぞれの尊格を修法の対象とする別尊法が発展したことで、各尊格をどう理解するのかが重要となってきた。その場合、それぞれの尊格が説かれる経典自体がどのように解釈されているかということが尊格の理解に大きく作用する。そして、このような経典解釈と尊格理解の関係を見出しやすい経典として『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇経』（以下『瑜祇経』）があげられる。以前、拙稿において東密における『瑜祇経』の解釈の変遷について考察したが、<sup>(1)</sup>それを簡単にまとめると、『瑜祇経』は空海（七七四～八三五）によって請来され、『真言宗所學経律論目錄』（所謂『三学録』）においては「金剛頂宗経」に分類されており、<sup>(2)</sup>元々『金剛頂経』系の経典と解釈されていた。ところが、台密の大成者たる安然（八四一～？）が、『金剛峰楼閣一切瑜祇経修行法』（以下『瑜祇経疏』）において「金剛吉祥大成就品第九」に説かれる胎蔵八

字真言などの胎蔵の要素に着目し、『瑜祇経』を「両部大法之肝心」とし、「金剛界の蘇悉の経典」という解釈を加え、台密の金・胎・蘇による三部立ての密教の強化を図った。<sup>(3)</sup>安然の『瑜祇経』解釈は醍醐寺系統を中心に東密にも影響を与え、金・胎両部を重んじ、三部立ての構造を取らない東密では平安後期頃から「両部而二不二の経典」と解釈されるに至った。といった内容である。このような経典解釈を基礎とする『瑜祇経』所説の愛染明王や仏眼仏母の解釈は経典解釈と尊格理解の関係を示す一例として注目されよう。そこで、本論では、東密、台密両方における尊格理解を愛染明王と仏眼仏母に焦点を当てて比較し、経典の解釈と尊格の解釈との関係性を探っていきたい。

## 一 中世における各法門と『瑜祇経』所説の尊格

『溪嵐拾葉集』「仏眼法事 秘曲」には以下のようにある。

## 日本密教における『瑜祇経』所説の尊格理解（鍵和田）

仍テ弘法大師ハ以テ愛染一為シ一経ノ総体ト。智証大師ハ大勝金剛品ヲ以テ為シ一経ノ総体ト。山門流ニ何カ故ソ以テ仏眼一独リ此ノ経ノ総体ト云ハシ耶示シテ云ク、弘法大師ノ相承ノ様ハ以テ愛染一為シ一経ノ総体ト。其ノ故ハ愛染ニ面六臂ノ左ノ面ニ仏眼、右ノ面ニ金輪、中ノ面ハ愛染也。故ニ以テ両部不二ノ総体一為シ愛染ト。今ノ経ハ又両部不二ノ経王也。尤モ以テ愛染一為シ一経ト。其ノ義甚タ深也。已上東寺ノ流義ナリ。

次ニ智証大師ノ御相承ノ様ハ、大勝金剛トハ者一身ニ十二臂アリ。此ノ一一ノ印相ハ十二品ノ法門ヲ表示セリ。故ニ大勝金剛ヲ以テ一経ノ総体トシ給ヘリ已上三井寺ノ流義ナリ。次ニ慈覚大師ノ御相承ノ様ハ以テ一経ノ総体トシ給ヘリ一経ノ総体ト。今ノ経ノ中ニ仏眼ノ題号ヲ置クニ吉祥成就品ト題セリ。吉祥トハ者妙ノ義、成就トハ者悉地ノ義。故ニ吉祥成就妙トハ成就蘇悉地ノ名号也。今ノ経ハ妙成就ノ根本ナルカ故ニ。此ノ尊ノ名字旁ク相応セリ。…中略…  
 覚大師ノ御相承、尤モ深秘也。〔大正蔵〕七六・五五四頁・中）

『溪嵐拾葉集』は台密の光宗（一二七六―一三五〇）によって、一三二一年から一三三八年頃の間書き継がれた文献で、口伝法門も多く、扱いには注意を要するが、右記からは当時『瑜祇経』所説の尊格について、各法門がどのような理解を示していたのかを広範的に知ることができる。すなわち、「東密の説（空海の相承）」「瑜祇経」を両部不二の經典とし、愛染明王を両部不二の尊格、『瑜祇経』の総体とする。「三井寺の説（円珍の相承）」「大勝金剛を『瑜祇経』の総体とする」「比叡山の説（円仁の相承）」「仏眼仏母」を『瑜祇経』の総体とする。」とされている。なお、安然是仏眼仏母が説かれる「金剛吉祥

品」を重視しているが、空海や円仁にこれらの説は見られない。<sup>(4)</sup>しかし、十四世紀頃には、東密では愛染明王を、台密の山門（比叡山）では仏眼仏母を、寺門（三井寺）では大勝金剛を『瑜祇経』の総体として重んじた様子がわかり、「覚大師ノ御相承、尤モ深秘也」と比叡山の解釈を評価していることから、『溪嵐拾葉集』の筆者が比叡山の立場から言及している様子が窺える。これを踏まえた上で以下ではまず愛染明王について見ていきたい。

## 二 東密における愛染明王の理解

まず、覚鑿（一〇九五―一一四四）の『愛染王講式』では冒頭の総礼に「南無両部不二慈悲示現愛染明王」（『興教大師全集』（以下『興全』）下・一二四―頁）とあり、文中にも

爰ニ愛染明王トハ者示ニ両部不二之体相ヲ、現ニ三目威怒之粧ヲ施シ四事円満之大用ヲ、顯ニ六臂持物之姿ヲ。〔興全』下・一二四―三頁）  
 夫レ愛染トハ者顯ニ因果ヲ於一身之色ニ、明王トハ者、表ニ金胎ヲ于一仏之名ニ。赫奕タル日暉ハ、照ス理智不二之形体ヲ、芬馥タル蓮華ハ、開ニ定慧而二之愛水ニ。〔興全』下・一二四―三頁）

胎金両部不離之即体号ニ之ヲ愛染ト。是ニ知ヌ両部ノ肝心ハ愛染也。

〔興全』下・一二四―五頁）

と、愛染明王が金胎両部・理智不二の尊格であることが強調される。また、実運（一一〇五―一一六〇）の撰述と考えられ

る『ㄎㄨㄛㄨㄛ秘決』(以下『秘決』<sup>(5)</sup>)では

今此ノ明王ノ日輪宝瓶ハ者表ニ理智冥合相応一実之義一。…中略…是レ  
 両部理智相応冥合シテ而モ開ニ顯ニ五部悉地一。為ニ愛染王ノ身上ノ五部  
 六臂之曼陀一。…中略…(1)愛染明王の図像上に両部や五部が表さ  
 れていること、(2)愛染の修法壇について、(3)壇で行う五種法につい  
 て、を箇条書きで示す)於ニ此ノ壇上ニ俱時顯ニ得スル愛染王ノ身上ノ両  
 部曼荼一也。(『真金』五・一七頁・上ノ一八頁・上)

と愛染明王像に描かれる日輪と宝瓶に両部理智冥合の意味づ  
 けをし、愛染明王の身上に両部の曼荼羅が表れているとする。  
 すなわち、『瑜祇經』が両部而二不二の經典と解釈されるよう  
 になるのと同じ平安後期頃から、愛染明王自体を両部不二の  
 尊格と理解する記述が見られるようになる。なお、管見の限  
 り、これ以前にこのような解釈は見出せない。更に、道範  
 (二一七八ノ二二五二)が実賢(二一七六ノ二二四九)の口決を記  
 したとされる『ㄎㄨㄛㄨㄛ口決』(以下『口決』<sup>(6)</sup>)には「題目事」  
 に『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經』の経題について、「金剛峰」  
 が金剛界を「楼閣」が胎藏を指すとした上で

瑜伽トハ者男声智界ノ声ナリ。瑜祇トハ者女声理界ノ声ナリ。此ノ二則チ翻シテ  
 為ニ相応ト也。問フ。今經ノ題ニ先ニ拳ニ両部理智一。次ニ置ニ相応ノ梵  
 音一。有ニ何ノ深意一乎。答フ。此ノ經始終以テ不二ヲ為レズ本ト。故ニ初  
 表シ両部一後ニ置ク不二ノ詞一也。(『真金』五・二七頁・下ノ二八頁・上)

とあり、それを受けて「愛染王品第五」には、

日本密教における『瑜祇經』所説の尊格理解 (鍵和田)

此ノ經ノ十二品ハ皆説ク不二智ノ境界一。而シテ愛染染愛ハ是レ不二ノ惣  
 体ナリ。七重ノ愛染義是レ不二冥合重々ナリ。瑜伽瑜祇相応不二ノ題  
 目ハ、只々是レ愛染不二ノ言也。(『真金』五・五五頁・上)

と言う。『瑜祇經』には第二品に染愛王、第五品に愛染王が説  
 かれ、両者は基本的に同体異名の尊とされることから、『瑜祇  
 經』は理智不二の境界を説く經典であり、「瑜伽瑜祇」という  
 理智不二を指す経題は愛染染愛が不二であることを表してい  
 ると言うのだ。さらに、道範記とされる『ㄎㄨㄛㄨㄛ口伝』<sup>(7)</sup>に  
 も「経題中で両部而二不二を指す「瑜伽瑜祇」は「染愛王品」  
 と「愛染王品」という愛染明王に関する品の義を以て総題目  
 が立てられたものである。」といった類似の説が見られる。<sup>(8)</sup>さ  
 らに、頼瑜(二二二六ノ一三〇四)は『瑜祇經拾古鈔』「金剛峰  
 楼閣一切瑜伽祇經品一(序品第一)」で

今經ノ十二品ハ總シテ是レ愛染王ノ三摩地ナリ。故ニ至リテ彼ノ品処ニ殊ニ置ク  
 総題一。是レ顯ニ一部ハ皆愛染王ノ同品ニ。故ニ云フ品一ト。

(『日藏經』三三三・二頁・下)

としたことを受けて、「愛染王品第五」に「愛染王品」に総題  
 を置く深意を説いて、

今經ハ以テ両部不二ヲ為レズ本ト。故ニ於テ不二尊ノ法ニ標ス総題一。良有レ以  
 也。凡ッ今此ノ尊ノ種子印契三昧耶形尊形皆顯ニ定慧不二之義一

(『日藏經』三三三・一三三頁・下)

日本密教における『瑜祇經』所説の尊格理解（鍵和田）

という。すなわち、『瑜祇經』は両部不二の經典であるから、不二の尊格の法に總題が表れるのだと両部不二の經典とする經典解釈と愛染明王を不二の尊格とする尊格理解を関連づけで説明しているのである。

このように愛染明王という尊格の理解を見て行くと、『瑜祇經』という經典の解釈が、同時にそこに説かれる尊格の理解へとつながっていく様子が知られる。なお、『瑜祇經』所説の尊格から仏眼仏母を選んだ台密には、このような愛染明王理解はほぼ見られない。

### 三 東密と台密の仏眼仏母に関する尊格理解の差異 ——慈円の解釈を中心に——

実運撰とされる『秘決』（東密）には以下のようにある。

今入<sup>ル</sup>仏眼三摩地<sup>ニ</sup>説<sup>ク</sup>トハ大阿闍梨諸成就之相<sup>ト</sup>者。仏眼尊<sup>ト</sup>者、是<sup>レ</sup>両部大日能生之母。不二<sup>ニ</sup>実之源底也。即<sup>チ</sup>今与<sup>ニ</sup>法性大日<sup>ト</sup>不二阿闍梨位<sup>ト</sup>全同<sup>ナルカ</sup>故<sup>ニ</sup>。

（『真全』五・二二頁・上）

すなわち、東密の実運は仏眼仏母を不二の尊格とする。これは愛染明王同様『瑜祇經』所説の尊格と捉えるためであろう。さて、慈円（一一五五〜一二二五）の密教には事相と教相の総合が見いだされるのが特徴で、台密における仏眼仏母の尊格解釈も慈円によって進められた。さらに、東密において『瑜

祇經』の解釈を進めた実賢や道範などと同時代の人物で、慈円の仏眼仏母に関する記述は当時の台密の仏眼解釈を知る上で最も重要だと考えられる。そこで、本項では台密の仏眼理解を慈円を中心に見ていきたい。以下は慈円の著作に見られる仏眼理解である。まず、『<sup>9</sup>別』「夢想記」では冒頭で自身の夢の内容を記し、それについて思案する中に

又思惟<sup>シテ</sup>云<sup>ク</sup>、神璽<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>仏眼部母<sup>乃</sup>玉女也。金輪聖王<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>一字金輪也。…中略…其<sup>ノ</sup>後<sup>又</sup>重<sup>ネテ</sup>加<sup>レ</sup>案<sup>ラ</sup>之<sup>処</sup>ハ、胎藏ノ大日<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>仏眼歟。金界ノ大日<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>金輪也。印相等<sup>ハ</sup>全同也。

（『統天全』密教三・二二三二頁・上〜下）

といった仏眼理解が見られる。また、同『<sup>9</sup>別』「瑜祇經行法」においても、

瑜祇經<sup>ハ</sup>両部ノ肝心也。毘盧遮那別行經<sup>ハ</sup>蘇悉地ノ肝心也。両部肝心<sup>ト</sup>者。瑜祇經ノ仏眼大成就品<sup>ニ</sup>説<sup>ク</sup>ニ成身ノ行法<sup>ヲ</sup>。用<sup>ニ</sup>行位ノ薩埵<sup>ハ</sup>仏眼ノ八字<sup>ヲ</sup>。…中略…又還<sup>テ</sup>成<sup>ス</sup>部母身<sup>ニ</sup>此ノ仏眼<sup>ハ</sup>胎藏大日也。

（『統天全』密教三・二二五頁・上〜下）

といい、さらに『法華別帖』にも、

今一字金輪<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>尊<sup>ハ</sup>、大日釈迦<sup>ノ</sup>令<sup>ニ</sup>合<sup>セ</sup>成<sup>セ</sup>尊也。是<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>金剛界大日也。仏眼<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>ハ、則<sup>チ</sup>胎藏大日也。教時義<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>、亦名<sup>ニ</sup>仏眼<sup>ト</sup>。

（『統天全』密教三・二六一頁・下）

などとあり、慈円が一字金輪を金剛界大日、仏眼仏母を胎藏

大日に配当する解釈を展開していたことがわかる。なお、同時期の東密でも、成賢（二一六二〜二二三二）口・道教（二二〇〇〜二二三六）記とされる『遍口鈔』『仏眼法事』には、

都<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>尊<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>胎藏大日也。…中略…「字金輪ハ金剛界大日也。彼ノ尊入<sup>リ</sup>仏頂輪三摩地ニ給<sup>フ</sup>也。此<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>理智之義也。

（『大正蔵』七八・六九三頁・上）

と、また、実賢（成賢と相弟子）口・道範記『口決』『金剛吉祥大成就品第九』には

大成就<sup>トイハ</sup>不二仏眼<sup>ナリ</sup>。上<sup>ノ</sup>品<sup>ノ</sup>大勝金剛金輪<sup>ハ</sup>、即<sup>チ</sup>金剛大日<sup>ナリ</sup>。

今<sup>ノ</sup>仏眼<sup>ハ</sup>即<sup>チ</sup>胎藏大日<sup>ナリ</sup>。…中略…「約<sup>ニ</sup>ハ不二現証門<sup>ニ</sup>不二<sup>トハ</sup>者<sup>ハ</sup>仏眼<sup>ハ</sup>胎<sup>ノ</sup>大日定印<sup>ノ</sup>住<sup>ニ</sup>ス金<sup>ノ</sup>月輪<sup>ニ</sup>。是<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>不二胎藏<sup>ノ</sup>大日<sup>ナリ</sup>。金

輪<sup>ハ</sup>金<sup>ノ</sup>大日智拳印<sup>ノ</sup>住<sup>ニ</sup>ス胎<sup>ノ</sup>日輪<sup>ニ</sup>是<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>不二金剛<sup>ノ</sup>大日<sup>ナリ</sup>。又<sup>ハ</sup>仏眼

曼荼羅<sup>ニ</sup>ハ前<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>ス金輪<sup>ヲ</sup>。金輪<sup>ノ</sup>曼荼羅<sup>ニ</sup>ハ前<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>ス仏眼<sup>ヲ</sup>。互<sup>ニ</sup>ヒニ<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>スナリ

主伴<sup>ヲ</sup>。不二<sup>ニ</sup>一体<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>易<sup>シ</sup>解<sup>シ</sup>。 （『真全』五・八六頁・上<sup>下</sup>）

などである。成賢、実賢は共に醍醐寺座主に座った人物で、東密でも醍醐の周辺には慈円とほぼ同時期に類似の解釈が見られたことになる。「はじめに」で拙稿の内容を紹介したように、東密の『瑜祇経』解釈は、安然の教説が醍醐寺を中心とする小野流に入り、発展したと考えられることから、仏眼仏母の解釈においても両者が影響し合った可能性は非常に高い。ところが、東密の仏眼解釈には『遍口鈔』において「此<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>理智之義也」と付け加えられたり、『口決』においても仏眼と

日本密教における『瑜祇経』所説の尊格理解（鍵和田）

金輪を胎金の太日に配当しつつ、内容的な主張の中心が両部而不二を前提とした仏眼と金輪の不二一体にあるといった慈円の解釈には見られない特徴がある。すなわち、『瑜祇経』を両部而不二の經典とする東密においては『瑜祇経』に説かれる尊格は基本的に不二の尊格と捉えられる傾向にあり、『瑜祇経』を「金剛界の蘇悉地」と判じ、胎藏八字真言や仏眼仏母の説かれる「金剛吉祥大成就品」を「金剛界中<sup>ニ</sup>兼<sup>ネテ</sup>説<sup>ク</sup>ナリ胎藏極密究竟之法<sup>ヲ</sup>」（金剛界中に合わせて胎藏の極めて秘密究竟なる法が説かれたもの<sup>(10)</sup>）として重んじた台密では仏眼仏母はあくまで胎藏の尊格と解釈されたと考えられる。なお、『溪嵐拾葉集』の「仏眼法事 秘曲」には、

仏眼ノ相貌<sup>ヲ</sup>云<sup>ハ</sup>ハ、金剛界ノ大日ノ胎<sup>ノ</sup>法界定印<sup>ヲ</sup>結<sup>テ</sup>胎<sup>ニ</sup>シテ胎藏三摩地<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>給<sup>ヘリ</sup>。故<sup>ニ</sup>兩部不二蘇悉地ノ本尊<sup>ト</sup>習<sup>フ</sup>也。…中略…如<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>答<sup>ヘ</sup>ツルハ東寺ノ流<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>習<sup>ハ</sup>蘇悉地ノ事<sup>ト</sup>分明也。

（『大正蔵』七六・五五四頁・下）

とあり、台密に仏眼仏母を両部不二の本尊とする伝承があったように捉えられる。ところが、この場合は「兩部不二蘇悉地ノ本尊」と表現され、あくまで蘇悉地における兩部不二を主張しており、兩部の外に不二を説かない東密の理解とは明らかに異なる。そこで、「東寺ノ流<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>習<sup>ハ</sup>蘇悉地ノ事<sup>ト</sup>分明也」と、東密には蘇悉地の伝統がないことを言い、見解の相違を示すのである。また、仏眼仏母を蘇悉地の本尊とする尊格理

## 日本密教における『瑜祇経』所説の尊格理解（鍵和田）

解は、安然が『瑜祇経』を金剛界の蘇悉地と判じたことと一致しており、台密における仏眼仏母の理解にも、『瑜祇経』の經典解釈が反映されていると考えることができる。

## まとめ

以上、『瑜祇経』所説の尊格理解について述べた。この背景に東密と台密の両者が互いに影響し合うことで発展した『瑜祇経』の經典理解があることを考えれば、日本密教においては東密と台密が相互に関係しながら、教相と事相の両側面より、各自の解釈を建立してきた経緯が窺える。また、別尊法が発展すると共に各尊格の理解が經典解釈に基づいて進んでいく様子は、教相と事相が密接に結びつき、同時進行で発展してきたことの一例として提示できるであろう。

なお、この他にも不二とされる尊格が存在するため、それらとの関係性を考える必要があるが、今後の課題としたい。

- 1 鍵和田聖子「東密における『瑜祇経』解釈の変遷」（『龍谷大学文学研究科紀要』三五、二〇一三）。
- 2 『定本弘全』一・四三頁～四九頁。
- 3 『大正』七五・四四一頁・上。
- 4 『大正』六一・四九四頁・下。
- 5 『真全』掲載『秘決』の底本は天文十八年（一五四九）に高野山覚融によって書写されたもの。書写年代は下るが、本書は実運

の代表的著作として伝わっており、内容から考えても、実運ないし醍醐周辺で平安後期頃までにまとめられたものと考えられる。

- 6 本書は奥書より道範が仁治二年（一二四〇）の十一月一日から三十日まで師で当時の醍醐寺座主であった実賢が法性寺において藤原（九条）兼実が『瑜祇経』の伝授をした際に、道範も同席してその口説を聞き記したものとされる。底本に弘安五年（一二八二）書写本があり、道範死後三十年あまりであるから、ほぼ奥書を信用して良いと考える。

- 7 底本として永仁五年（一二九七）書写本が挙がる。また、貞応三年（一二二四）に道範が記したものを順に写した記録が見られ、少なくとも十三世紀後半には存在したことがわかる。

- 8 『続真全』七・一〇六頁・上。

- 9 慈円については、三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）、『台密の理論と実践』（創文社、一九九四）、水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）などを参照。
- 10 『大正蔵』七五・一八八頁・下。

## 〈参考文献〉

- 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）  
 三崎良周『台密の理論と実践』（創文社、一九九四）  
 水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）  
 鍵和田聖子「東密における『瑜祇経』解釈の変遷」（『龍谷大学文学研究科紀要』三五、二〇一三、二八～三九頁）

〈キーワード〉『瑜祇経』、愛染明王、仏眼仏母、慈円

（龍谷大学非常勤講師・博士（文学））